

「芸術祭」をひも解く：近代化と万博・オリンピック・芸術祭

第1回 ゲスト：吉見 俊哉 氏（社会学者） レポート

2021年8月22日（日）10:30-12:00

会場 | アトラボあいち（オンライン実施）

社会学者であり、2005年の愛知万博の「海上の森」保全問題にも関わってきた吉見俊哉氏をゲストに迎え、五輪と万博そして芸術祭について考えを紐解き、深めていくレクチャーを実施しました。

また、このレクチャーは愛知県の教職員や美術教育関係者を対象にした「サマー・スクール」のレクチャーの一つとしても実施しました。

レクチャーは前半と後半にわかれ、吉見さんが提示した3つの大きな問い合わせて、その議論を後半に参加者と行うためにその前提を共有する前半のレクチャー、という構造で展開してきました。吉見さんから出された3つの問い合わせは次の通り。

- 1) なぜ80年代末以降、五輪と万博の構想は挫折し続けてきたのか？
- 2) なぜ五輪と万博を繰り返すことをやめられないのか？
- 3) 名古屋五輪→愛知万博→あいちトリエンナーレ→国際芸術祭、この流れの非連続的契機とはなにか？（「海上の森」問題と「表現の不自由・その後」問題をつなぐものはなにか？）

1と2の問い合わせにつながる五輪と万博の繰り返しからレクチャーがスタートしました。

五輪と万博の繰り返しは、1964年の東京五輪を皮切りに、1970年の大阪万博、1972年の札幌冬季五輪という、夏季五輪・万博・冬季五輪での1セットで、その後も繰り返されています（図参照）。

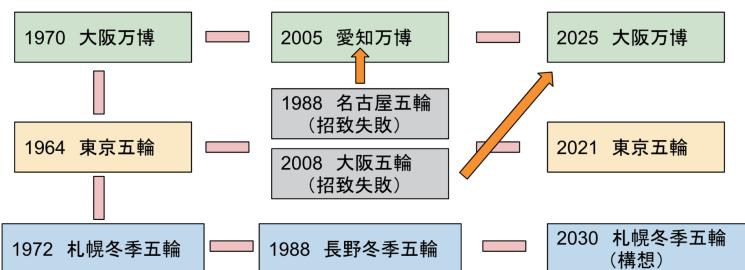
1988年の名古屋五輪、2008年の大阪五輪は招致

に失敗しますが、2005年の愛知万博そして2025年の大阪万博開催へとその熱はシフトしていきました。さらに2030年の冬季五輪招致を目指し、札幌では招致活動が進められています。つまり、成功と言われている五輪と万博が開催された、60年代70年代のパターンを2020年代も繰り返そうとしていると言えます。

1964年の東京五輪は成功したと言われていますが、2021年の東京五輪は当時の麻生太郎財務大臣に「呪われた五輪」と呼ばれたように、コロナ禍の打撃を受けて困難な開催であったと言われています。しかし実際のところ、2021年の東京五輪は最初から破綻していました。開催までに不祥事などで東京都知事とJOCの会長がそれぞれ2度辞職し、共同通信による世論調査でも中止や延期を求める人が6割を超えるなど、最も不人気な五輪という調査結果が出ていました。

また、新国立競技場の設計白紙撤回、エンブレムの盗作疑惑による取り下げ、開会式演出に関わる辞退や不祥事などが相次ぎました。2021年の東京五輪開催までには、2回の招致失敗がありましたが、なぜ五輪への憧れはなくならないのでしょうか。

一つには、日本経済が低迷し日本自体が衰退していく中で、テレビによって反復される1964年の東京五輪の成功が忘れられないから。そして、もう一つが「お祭りドクトリン」による経済復活への期待です。



図：五輪と万博の関係（吉見さんの図から再作成）

ドクトリンとは、政治などの基本原則のことを指し、テロや災害などの大きなショックによって政治の基本原則が通常ではない方法で大きく変更されることなどが例にあげられます。日本の場合は「お祭り」が基本原則を変える起爆剤になると言います。

では、万博はどうなのでしょうか。1970年の大阪万博が成功を収めたことが発端となっています。大阪万博では予想を遥かに上回る6,000万人の来場者があり、経済的に大きな黒字となり成功だとみなされるようになりました。その後、各地で様々な博覧会が開催されるようになります。1975年沖縄国際海洋博覧会、1981年神戸ポートアイランド博覧会（神戸ポートピア）、1985年国際科学技術博覧会（つくば科学博）、1990年国際花と緑の博覧会（大阪花博）などがあげられます。

80年代以降の万博は「開発主義」とも言われ、万博開催のために再開発を行い、地価をあげ大きな利益をあげることで成功してきたとみなされてきました。

愛知県では2005年に愛知万博（愛・地球博、日本国際博覧会）が開催されました。これまでの「開発主義」とは違う万博の流れをつくる大きな転換点となりました。

会場となっていた「海上の森」を保全するために地域の環境保護団体などが立ち上がり反対運動を起こしたことによって、環境保護と共存する万博のありかたを模索することになります。

初期のテーマは「Beyond Development（開発を超えて）」。これまでの開発主義だった日本の万博の歴史を批判する野心的なものでした。

後半は、前半のレクチャーをふまえた参加者との意見交換を行いました。質疑応答のかたちですみましたが、レクチャーの中で何度も吉見さんが問いかけた、「私たちはどうすればいいのか？」という点について、どう考えていくかという意見が出てきました。

このレクチャーが美術教育関係者に向けた「サマー・スクール」の一環でもあったことで、吉見さんからは大学の教育現場を例に「アクティブラーニング」について話がされました。

いま日本の教育現場では様々な場面で「クリエイティビティを育む」ことが求められ、「アクティブラーニング」を積極的に取り入れる教育方針がとられています。

しかし、ここ30年ほどをみると「自分たちが自分たちの力で何かできる」といった自信や気持ちはむしろ低下していると吉見さんは言います。社会が忙しすぎる構造になっていて、クリエイティビティを磨き發揮する暇がないことが原因です。例えば、大学をみると1学期に行う授業回数や取得する科目数などは増加しています。

大学は知識ではなく思考の仕方を伝える場所ですが、知識を教える場所になってしまっているといい、教員側も学生側も真面目な人ほどかえって暇がなくクリエイティビティを発揮できない傾向にあります。

芸術はクリエイティビティが表出したものとして1つわかりやすいのですが、こうした芸術を取り扱っている芸術祭にはどんな意義が見出せるのでしょうか。今後の芸術祭はどうあるべきか、意義とは何かということについても参加者から質問が出ました。

絵本「スイミー」を例に、五輪と万博、そして芸術祭について考えていきました。絵本に出てくるスイミーたちは大きな魚に対抗するために協力しますが、この大きな魚が五輪であり万博であり、スイミーたちがつくる大きな魚が芸術祭であると言います。そして、その目になるのがオーガナイザー、キュレーター、監督です。地域の人々やアーティスト、そのほかにも様々なひとたちのサポートや参加があってそれぞれの芸術祭がかたちづくられ、実現していきます。

つまり、五輪と万博と同じフレームに芸術祭があるわけではないのです。政治的な理由などで否応なく開催しているのではなく、意義を見出して行っているのではないか、というのが吉見さんの見方です。

とくに愛知県は、五輪招致に失敗し、万博では環境保全問題に向き合い、あいちトリエンナーレ2019では表現の自由に関する問題に直面しました。そうしたことからの学びが、次の芸術祭に生きているのではないか、という吉見さんの意見に対し、参加者のみなさんはどうに考へたでしょうか。

（レポート松村淳子）